



誰にも逢いた くない夜に

文風 冴月

ドロップ

口の端から零れ出た「知らない」「いない」「痛い」「嫌い」「嫌い」

口の中で転がした「愛して」「壊して」「殺して」「如何して」「如何して」

泡が萎むみたいに消えられたらなって

ねえ？

湖底の月

深ければ深いほど
闇の濃度が増す湖底

君が見つけて呉れたんだよ
僕は月

深い湖の底で蹲っていた僕の手を
君が掬い取って呉れた

「君に握って貰ったこの手は
もう僕には要りません
どうか切ってしまうて下さい」

そう呟いた僕の手は
紅い血と共に消えた
何も触れなくなった

次の日

もう逢えないと思って湖の底で蹲っていた
そんな僕の鼓膜を君の声がノックした

「君の声を聞いたこの耳は
もう僕には要りません
どうか削いでしまってください」

そう呟いた僕の耳は
紅い血と共に消えた
何も聞こえなくなった

次の日

もう逢えないと思って湖の底で蹲っていた

そんな僕の目の前で君が微笑んだ

「君の笑顔を映したこの目は
もう僕には要りません
どうか剋ってしまってください」

そう呟いた僕の目は
紅い血と共に消えた
何も見えなくなった

次の日

もう逢えないと思って湖の底で蹲っていた
そんな僕の唇に君の唇がそっと触れた

「君と口づけを交わしたこの口は
もう僕には要りません
どうか奪ってしまってください」

そう呟いた僕の口は
紅い血と共に消えた
何も話せなくなった
愛を示せなくなった

次の日

もう逢えないと思って湖の底で蹲っていた
血だらけのボロボロで蹲っていた
そんな僕の前にもう君が来ることはなかった

手も目も耳も口も失くした僕は
まだ輝けているのだろうか
輝けてないから
君が来ないのだろうか

「君だけが占めたこの心は
もう僕には要りません

どうか壊してしまってください」

もう眩けない僕は
ひたすらに願った
あなたを想うこの心を取り除いて呉れと
そう僕は願った

この深い湖の底で

ナイフの感情

僕がいつも君を殺す練習をしている時、君はきっと空を飛ぶ夢を見る。

例えばそれが、砂漠に落ちたひとつの隕石みたいにちっぽけでも。君は誰も見上げなくなった空を、綺麗な笑顔で飛ぶ。僕の中で弾け飛んでいたのは、他でもない、ナイフに似た感情。手首を傷つける以外の選択肢は、君を殺す練習という考えでしか足りえない。隕石の落下地点、傷痕、そこにできるのは巨大なクレーターとひとつの後悔。機械仕掛けで動く惑星はいつか僕らを見つけるだろう。それまでは。僕は君を殺す練習をする。

冷蔵庫の中で暮らしていると肌の表面がひどく乾燥する。冷えた銀のナイフは折れることを知らないが、僕がいまだに見たことのない虹の向こうにひっそりと歪んで見えたのは淡い逃避行の蜃気楼。夢が消えてなくなった社会に、人々は空に機械の花火を咲かせる。爆音と煙に彩られた空は、灰に覆われている。僕のナイフはそれを映し出す。銀。綺麗な顔の君。赤。染め上げる、色。

命の乏しくなった砂の惑星で、僕らの狂宴が終わりを告げるその時まで。僕は君を

銀色の荒野で鍵をなくしてしまった。

月が笑いかけているのは、ラクダの歩く丘。そこで二人の若者が檻を纏っている。手綱をしっかりと握り、こちらを見ている。男。月。

空気は薄汚れている。あたり一面、木は生えておらず、丈の短い草がところどころに思い出したかのようにひっそりと育っている。

水汲み場の近くで騒ぐ一匹のアメーシア。さながら流星を模した世界時計の首だ。僕はそれを忘れないようにしっかりと書き留める。

なくした鍵を探さなくてはいけない。夜空には大きな月が四十二個。輝きを湛えている地上のヒトデたち。その横で盃を交わす男たち。風のない夜だった。

村に戻ると、僕の血が泣きながらやってきた。どうにもなくしてしまった鍵のことを心配しているらしい。そんなに心配することはないさ、と告げると血は嬉しそうに笑う。うっすらと酸化しつつある頬は今にも崩れそうだ。

そこをそっと撫でてみる。指の先についた絵具みたいな赤。僕も嬉しくなって笑う。

明日は雨が降る。そうならばフラスコの掃除をしなくてははいけない。鍵を探すのはそのあとで、だ。

手首を切る音を聞いた夜

手首を切る音を聞いた夜、僕らの音楽は第三楽章に至り、あの日奏でた記憶の高音を思い出そうとする。

景色が歪み始めて、いつか行ったことのある荒野の教会で、夕日が沈んでいくのを眺める気持ちを思い出す。

砂天秤の歩き回る音だけが、僕の部屋にこだまする。それ以外は、何も聞こえない。僕と君の呼吸音は、もう聞こえない。

夜が更けていく。

窓辺に置いたナイフが乾いたので、そっと戸棚にしまう。君はぐっすりと床に寝ているから、僕がナイフをぞんざいに扱うのを咎めない。先週買ってきたカーテンをぐるぐると身体に巻きつけると、記憶の匂いがした。

うっすらとした太陽の光、思い出、二人で歩く歩道橋、頭上の鴉、ホームセンターの自動ドア、薄緑色のカーテン、君の横顔、思い出。

匂いは最もよく記憶を呼び起こすのに適しているらしい。そうやって僕は、まだ部屋の匂いが染みついていないカーテンに鼻を擦りつけて、君との思い出を探す真似をする。

このままずっと、夜が明けなければ良いのに、と願いながら。

道端に置かれた花束が語るには、
「女の子が道に飛び出したのです。そして、真っ赤な自動車に轢かれてしまったのです」
風が吹いて、揺れる花卉。黄色と桃色が頬を撫でるように。
いつしか、花束は枯れる。さようなら、という言葉は天に昇って消えた。
傍らには少女の霊が立ち竦み、新たな花が咲くのを心待ちにしている。

Light song

きらきら舞い散る
舞い散る星の吐息
陽炎に埋まってビルの間を忍び寄る
遠くの物陰、暗い、暗い

君にあげた憂鬱を取り返す不慣れな涙
明日失われる銀時計に、僕はまっすぐに定規で線を引く

闇の霧が訪れる
視界が霞み、巡りゆく光のテーゼ
沈みかけの歌声と、永久の迷宮を彷徨っていく

リズムに乗せたちょっとした希望
繋ぎ止めていくのは、二人の奇跡
またとない一日が少しだけ遅く始まっていく
息を吸った

厭な夢ばかりを見る。

ビルの屋上から飛び降りる自分。

ナイフの刃を綺麗に研ぐ自分。

自動車を運転していて崖下に落ちる自分。

挙げればきりが無い。死を連想させる夢が、毎夜の如く私の枕元に立つ。真夜中でも目が覚めてしまい、今まで見ていた夢をくっきりと思い出すことができる始末。身体中にかいた厭な汗を拭くと、手のひらがべっとりと濡れて更に不快になる。

ある晩、いつものように厭な夢を見た。燃える家の中で私は探し物をしている。何処にしまったのかはなんとなく検討がついている。二階の寝室のベッドの脇の棚。脳内にイメージが広がる。なかなかそこに辿り着けず、焦りばかりが募る。廊下は一面火の海で、壁まで炎の舌が伸びている。私はもつれそうになる足で懸命に二階を目指す。走る。走っている。探し物が、そこにある筈だと妙な期待と焦燥感でもって、走る。けれど、何を探しているのかは定かではない。

そんな厭な夢。

目が覚めて、今のが夢だったのだと悟る。真っ暗な部屋の中で、また厭な夢を見てしまったと溜息をつく。

コップで水でも飲んで寝直そう。私はそう考える。厭な夢を見るのにも慣れたもので、別段どうということとはなくなっていた。夜中に起きてしまうことを除けば、苦でもない。

しかし、その晩は違っていた。

キッチンへ向かう途中、不思議な生き物に出逢った。

それはひらひらと舞う蝶々だった。だが、一般に蝶々と考えられるようなものではなかった。身体が光っていたのだ。月の明かりをそのまま再現したような、仄かな光。けれど、それは目に優しく、暖かな灯だった。

薄茶色、まるでカフェモカの泡のような色で、蝶々はゆったりと部屋の中を舞っている。

思わず手を伸ばすと、そいつに触れることができた。ひんやりとした体温が伝わる。身体は石のように硬かった。これは蝶々ではないのか。

「月蝶石」

蝶々は鈴が鳴るように、歌うようにそう言った。

「わたし、月蝶石」

その声は本当に美しい少女のようであった。私は悪い夢の続きを見ている気分になった。

彼女が大人しくしているのを良いことに、その石でできた翅を触る。つるつるした表面には、幾何学的な紋様が描かれているが、凹凸は感じられない。月蝶石は誰かの作った芸術作品のように完成された美を秘めている。

「わたし、月蝶石。あなたは」

握れば折れてしまいそうなほど華奢な触角で、私の人差し指に触れる月蝶石。

「私は」

声が掠れる。きちんと伝わったのだろうか。

「そう」

思わず笑みが零れる。

外は闇。本当の夜だ。動いているのは私と月蝶石だけ。それはとても美しい世界だ。

『死にたいと願った時に殺してくれて

生きたいと祈った時に殺してくれて

生きたくないと言った時に、殺してくれる世界』

夜がこの家に月蝶石を閉じ込めたのだろうか。この家は、夜にとってはひとつの檻なのだ。それは私にとっても同じことだ。暗い、世界。家の中も、外も、すべてが暗い。ああ、本当の夜なのだ。

月蝶石が可愛らしい声で歌う。

「すわせて、あなたの、蜜」

私は左腕を彼女に差し出す。ほっそりとした白い手首が、暗闇に浮かび上がる。月蝶石の鱗粉がはらはらと舞う。

月蝶石はそっと私の手首に舞い降りると、音もなく血管から蜜を吸った。

それはひどく芸術的な景色で、月蝶石が翅を楽しそうに動かすのを、私は満足げに眺めた。

彼女が吸いきれなかった蜜が、溢れて、腕を伝って床に垂れる。ぽたぽた、と軽快な音を立てて。

私は笑顔を抑えながら、月蝶石の翅を撫でる。

蜜が吸われていく。

私が消えていく。

ああ、次に生まれる時は森の奥にひっそりと咲く花になれたなら。

そう、思った。

誰にも逢いたくない夜に

誰にも逢いたくない夜には窓を開けて外の冷気が忍び寄ってくることを確かめ部屋の電気を全て消して星の明かりだけが世界を支配するようにして耳を塞いで両目を閉じてそっと部屋の隅っこに蹲って自分がこの世界からひっそりと溶けて消えていくようなイメージをして呼吸を止めてそれでも貴女を悩ませる陰鬱な諸々の些事が頭を駆け巡るようなら裸足のままで外に出て星と月と夜が歌う闇の中へ手探りで進んでいくしかないがもしほんの少しでもこの世界を愛せるというのならもしくは誰か愛する人がいるのなら夜空が一番近くで見えるところまで歩いて行ってそこで瞳の奥にきっちり星座のある夜景を焼き付けて頭の中にプラネタリウムを浮かべ裸足のまま家へと駆け戻り思いつくままに紙に自分の中に氾濫する想いをぶつけてみるとなるほどすっかり厭な気持ちなんか何処か遠くへ行ってしまおうけれどそれはいつかまた返ってくるのだろうがその時はまた静謐な夜に身を委ねて昇って欲しくもない朝陽をぼんやりと夢想するしかないのだ。

ゆっくりと引き裂いていく。

手首に生まれる一筋の赤い軌跡が表すのは、後悔と、貴女の罪。

叫ぶことのできない夜に、うっすらとかかる雲で、いつも通りの月さえ今宵は憂いを帯びている。吐き出す息に混じる、不愉快な色。

誰にも知られずに、何処か遠い、鬱蒼と暗い森の奥深くで、ひっそりと闇に溶けていくことができたなら――。

目を潰すことも叶わず、耳を塞ぐことも能わず。

二度と鳴ることのない繋がりが、科学の産み出した両手に余る機械が、薄く砂埃に煙る昼間の太陽が、今は非常に疎ましい。

赤く染め上った窓に映るのは、いつの日かの情景。

夜に行く電車。改札。ポケットに入った飴玉。

嘘となってしまうのならば、そうなることを厭わない。けれど、この記憶は、恋慕は、慟哭は――彼方、なかったことのように、空に消えていく。誰もそれを知らず。行方。

暗い世界を旅する切符を独りで捜し歩いていた。それは何処かにあって、何処にもなくて、貴女の手の中にあって、すでにそれは寂れて、本来の用途を忘れてしまったものとなっている。

汗で滑る手に握ったランプは、頼りなく灯り、数秒後にはふっと思い出したように消えていく。辺りは漆黒に包まれる。重く、じつとりと、沈殿する。

私にはそれが耐えられない。

心の平静を厭という程に乱す。

だから、ここを、去らねばならない。